

Steel Landscape

鉄の点景



ディスク式オルゴールの櫛歯（振動板）。80弁のものを2枚使用している（ダブルコーン）。材質は企業秘密とのことだが、硬めの鋼材をスタート材料に独自の熱処理によって製造されている。フレームは通常亜鉛ダイカストだが、コストと加工性の問題がクリアーされれば、鋳鉄も魅力的な素材であるという。



現在製造されているディスク・オルゴールの上位機種。弁を弾く力が大きくとれるため、華やかな音色を奏でることができ、ディスクを交換することであらゆる曲をカバーできる。

オルゴール

郷愁を誘う清澄なオルゴールの音源は、鋼製の櫛歯を機械的に弾くことで得られる、いわば鋼鉄のハーモニーである。案外に忘れられていることだが、その技術的な歴史を振り返ってみると、時計に代表される精密機械の源流に突き当たる。今回は、箱の中に閉じ込められたその過去と歴史に目を向けつつ、技術と時代の微妙な関係性に思いを馳せてみたい。

シリンダー・オルゴールの櫛歯。写真は50弁の上位機種だが、目的に応じてさまざまな弁数のものがある（最低限の音階からなる玩具用などでは18弁）。ディスク式が全音階で構成されるのに対し、シリンダー式は必要な音階のみ（曲に応じて）で櫛歯が構成される。



蓄音機に追われたディスク・オルゴール

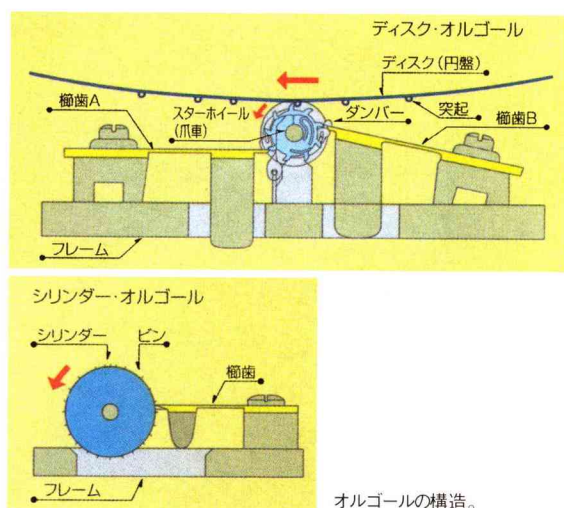
往々にして人は追憶のうちに、癒しを求める。過去というのは不思議なもので、かりに辛酸に満ちた記憶であったとしても、時を経ることで熟成された美酒のように甘いものになってしまうことがあるものだ。オルゴールの奏でる透明感のある音は、そうした「思い出」と妙に相性がよい。

最新のオーディオ装置から響鳴する高品位のデジタル・サウンドよりも、小さな箱からこぼれる撥条仕掛けの音楽のほうが、無意識の底に堆積した記憶の破片を巻き上げることに精妙であるというのは、過去においてこの音響装置がひとつの輝かしい時代を彩り、いまは生々しい時代の波から一歩引いた存在になっていることとも関係があるのかもしれない。

オルゴールが自動演奏装置の花形として、カフェやパブとい

った場所で人々の耳を楽しませていたのは、19世紀後半頃のことだった。CDチェンジャーに馴染んだ現代の若者たちにはレコード盤のジューク・ボックスでさえも骨董品に思えるだろうが、それよりさらに古き時代、ジューク・ボックスにレコードではなく薄い銅のディスクがおさめられていた時代があった。ディスクには曲のパターンが穿孔され、櫛歯の振動板を弾くしくみになっている。コインを入れて曲を選んだ後は、ディスクをセットして演奏をスタートするところまでが自動で行われるようにつくられたものもあった。動力はすべて撥条である。この時期、欧州や米国には幾多の優れたオルゴール・メーカーが現れ、数々の傑作機が作られていった。

しかしかくのごとき名門のオルゴール・メーカーも、ほとんどが今世紀初頭には社業を閉じるようになっていった。その原因は、蓄音機の登場にほかならない。エジソンが手動式のドラム



オルゴールの構造。

型フォノグラフを発明したのが1877年、その数年後には電気モーターが発明された。やがて新しい時代の申し子として登場してきた蓄音機は、撥条ではなくモーターで動き、音楽を原音のまま記録できるという驚異的な装置として人々を魅了した。1887年にプレスによって量産が可能な円盤型レコードが発明されると蓄音機は急速に普及し、ディスク・オルゴールは姿を消していった。

日常的な空間から姿を消していったディスク・オルゴールに比べて、シリンダー・オルゴールの比較的小型のものは、生産技術の進展とともにアクセサリや玩具などと一体化しつつ生活の中にちらばっていき、今日まで広く親しまれる存在になった。現在、身近に見られるオルゴールは、ほとんどがこのシリンダー式（ドラム状のシリンダーに打ったピンで歯を弾く）である。

精密機械技術の発達史とともに

オルゴールの原形はカリヨン（鐘）を組み合わせた自動演奏機械だった。円筒に打たれたピンが回転してハンマーを持ち上げ、鐘を打つというからくりである。自動演奏カリヨンは1381年にブリュッセルで建てられたニコラス塔に初めて設置され、その後時計塔のからくりなどの方向へも発展していくが、15世紀初頭に撥条が発明され、時計が精密機械として小型化してゆくとともに今度はカリヨンを小さな金属のからくりの中に組み込もうという試みが盛んになった。やがて18世紀後半、スイスの時計職人たちが歯を用いる現在のシリンダー式オルゴールの原型となるものを確立し、改良を加えていった。さらに19世紀後半になると、ディスク式のものがドイツで開発された。ディスク式は曲目をある程度自由に選択交換でき、製造上もシリンダーに必要とされる高度なピン打ち技術を必要としなかった。

日本ではフランシスコ・ザビエルが守護大名である大内義隆に自鳴琴を贈ったとの記録が残っており、これが初期のカリヨン付き置き時計だったと推定されている。その後も異国の珍しいからくり機械は幾度か記録に登場してくる。オルゴールとい



歯の調律。熟練作業によって音が合わせられる。銅製の歯のうち低音域には鉛のウェイトがつけられている。



シリンダーと歯の位置合わせ。上位機種では手作業で取り付け位置が微妙に調整される。

う呼び名は、オランダ語のオルゲル（オルガン／機関）が訛って生まれたものであり、そうした歴史を経て慣用されるまでになった。さらに大正時代になるとスイス製の時計に組み込まれたオルゴールが輸入され、洋風文化の一部として受け入れられていくことになる。

こうして歴史を振り返ってみると「時を告げる機械」とともに発達したオルゴールが、精密機械技術の源流に近いところに位置してきたことが分かるだろう。現在オルゴールの生産量（とくに心臓部の音響部分）で世界のトップにあるのは日本の一メーカーであり、スイスのメーカーがそれに次いでいるという。オルゴールが時計と兄弟分にあたる精密機械技術であったことを知るとそうした現況もうなずける。

精密機械技術として育ちひとつの時代を彩ったオルゴールはその後、20世紀の機械技術が複雑巨大なマスに発展していくなかで、ひたすらに過去の時空間にとどまり、「思い出」の世界に生き長らえてきたようにも思える。近年そうしたオルゴールの音色に「癒し」の効果を見出す研究がなされているという。われらが20世紀も、もうすぐ「過去」になるわけだが、苦闘に満ちたこの100年をわれわれはどう受け止め、そしてその記憶のなかにどんな癒しを見出すべきなのだろうか。

蓄音機に追われたディスク・オルゴールは、現在は愛好家のための高級品としてつくられ続けているが、その音色のうちには20世紀のわれわれが過去におきざりにしてきた忘れ物がなんだったのかを思いだすヒントがあるようにも思えた。

[取材協力：(株)三協精機製作所]